

嘉庫 嘉悦大学学術リポジトリ Kaetsu University Academic Repository

英語の進行表現について

著者名(日)	野口 美咲
雑誌名	嘉悦大学研究論集
巻	52
号	1
ページ	101-137
発行年	2009-10-01
URL	http://id.nii.ac.jp/1269/00000258/

研究論文

英語の進行表現について

An Aspect of English
: The Form and the Meaning of Progressive

野 口 美 咲

Misaki Noguchi

<要 約>

本稿の目的は、形式が同じであるにもかかわらず、相互の関連性が認められないものとして扱われてきた言語現象を認知言語学的に捉えなおし、両者が意味のネットワークで結びついているということを明らかにすることにある。そのため、表現（形式）と意味の関係、特定の語が表す意味や用法のネットワークを提示しようと試みている。研究対象は英語の進行相であるが、完了相、使役表現、受動態、単純現在時制、単純過去時制、分詞の形容詞的用法などとの関連性も明らかにされる。

言語の相というのは、特定の場面の性質ではなく、あくまでもその場面を解釈する者にとって、どのような意味を持つのかによって決まる。従って、進行表現に至るまでの解釈者の事態の捉え方を明らかにし、さらには文脈における進行表現の持つ効果を提示することによって、より豊かな解釈へとつなげてゆくことが可能であると思われる。

言語の形式と意味とを考察する際には、それが用いられる文脈を抜きにしては、議論を進めることができない。本稿では Arthur Conan Doyle の短編 ‘The Dancing Men’ を取り上げ、実際の進行表現の使用を観察し、文学的效果を考察している。進行表現を使用することによって、反復して起こることがらに対する話者の苛立ちや軽蔑の気持ちを表現したり、動作性を強調することによって静と動の対比を顕著に表現したり、描写する状況を鮮明にし、読者に臨場感や現実味を感じさせることにつながったりしていることが明らかになった。

<キーワード>

認知言語学 (cognitive linguistics)、相同性 (homology)、文法 (grammar)、相 (aspect)、進行相 (progressive)

0. はじめに

今日の英語教育の場では、特に中等教育機関では、さまざまな文法項目を断片的に提示するにとどまっているのが現状である。しかし、似たような言語形式を持つ表現間の関連性や、文法項目間の相互のネットワークを広げて関連づけることによってこそ、理解が深まり、長期記憶につながるものだと考える。そのため、本稿では表現と意味とのネットワーク、同一語内の意味間の派生ネットワーク、同一語を使った用法間ネットワークを提示する試みを行っている。本稿では、進行相表現を中心としているが、その周辺に存在する完了相、使役表現、受動態、単純現在時制、単純過去時制、分詞の形容詞的用法などとのつながりを明らかにすることをひとつの目的としている。

人間は、お互いに共通する便利なルールを作り、それにのっとって意志疎通をはかるといふ、既存の枠の中で行動する保守的な面がある一方で、有限個の選択肢から無限個の文を作り出し、そこに新たな意味を見出そうとするような創造的な面も持ち合わせている。したがって、誤文と言われるものの中には、純粋に統語上の間違いと、統語上の間違いではなく表現形式の意味と場面とが一致しないという間違いとが含まれる。誤文と言われる文の中にも、形式にかなった意味を十分に想定できるものも多く、誤りがあるとするならば、ある特定の文脈内においてふさわしくない、ということであろう。教育の場においても、この文は正しい、この文は間違っている、という単純な正誤だけにとどまることなく、形式から引き出される文の意味と文脈との一致という意識を育てることが重要であると考えます。

言語表現の正誤を判断する上で、場面と切り離して考えることはできない。したがって本稿では、進行表現の発生を場面と関連づけて観察するために、特定の物語を取り上げることにした。そうして文脈を限定することにより、場面と表現形式のつながりを浮き彫りにすることも、本稿の目的としている。

1. Aspect とは

英語における **aspect** とは、基準となる時点において物事が継続しているか、すでに完了しているか、という物理的・客観的な様子を描写するものではなく、話し手が物事に見出した継続性や完了性を表す表現形式のことである。したがって、時間軸における位置づけという意味での共通点はあるものの、物事が発話時よりも過去のことなのか、発話時以降の未来のことなのか、というような **tense** とは区別されるべきものである。**aspect** にはいくつかの種類があるが、その中でも「継続」と「完了」はプロトタイプ的な概念とすることができよう。

表 1. 相と名詞に観られる境界

	有界的	無界的
相	完了	継続・未完了
名詞	可算名詞	物質名詞

表 1. で表されているように、ある時点からある時点までの間に完了している、という意味を表す「完了」は、はじまりと終わりがはっきりした期間のことを述べているという点において、輪郭のはっきりした可算名詞と平行していると言える。また、はじまりと終わりのはっきりしない「継続」の感じは、輪郭のはっきりしない物質名詞との共通点があると考えられる。このような名詞との相同性を考えると、「継続」と「完了」は人間の認識の中で中心的な概念であると言えよう。

典型的に進行相とは、基準となる時点を含むその前後の一定期間に継続中の動作や状態を意味し、その基準となる時点が過去か、発話時か、それとも未来なのか、という点によって時制が決まる。同じように完了相は、基準となる時点までのいずれかの時点に動作が完了していることを意味し、その基準となる時点が過去か、発話時か、それとも未来なのか、によってその表現の時制が決まるのである。つまり、**aspect** は **tense** と組み合わせることによって初めて、時間軸における意味づけが行われるのである。学校文法では **aspect** が時制の一種として、例えば「現在進行時制」「過去完了時制」などというようにしばしば扱われるのは、おそらくこのためだろう。しかしすでに述べたような理由から、**tense** と **aspect** は区別されるべきものであるから、「現在完了形」や「現在完了表現」などとする方がふさわしいと考えられる。

2. 英語と日本語における完了相と進行相の相関

従来の学校文法では、進行形に対応させる訳語として「～テイル」表現が使われることが一般的であり、おそらくそれがプロトタイプ的な意味であることは間違いないと思われる。しかし言語が違うのだから、この 2 つの表現で表される領域にはズレがある。そのため日本人の英語学習者にとって **aspect** の習得が難しく感じられるのである。ならばこのズレをはっきりさせることによって、表現の使い分けが可能になるものと考えられる。「～テイル」表現を考察する上で完了相に触れることは欠かせないため、本稿では必要と思われる場合には完了相についても合わせて議論する。

(1) 本動詞としての‘HAVE’から、完了表現の助動詞になるまで

これまで英語教育の場では、完了形に用いられる‘HAVE’を助動詞と説明することは浸透し

ているが、本来は本動詞である‘HAVE’との意味的な関連性（つまり、なぜ‘HAVE’なのか、という点）については十分な説明がなされていないように思われる。そこで、この関連性を明らかにするために、ここで瀬戸他編（2005:448–450）の意味ネットワークの広がり进行を参考に、まず本動詞‘HAVE’の意味を明記したい。本動詞‘HAVE’の最も中心的な意味は OED によれば、次の通りである。

1.a. To hold in hand, in keeping, or possession; to hold or possess as property, or as something at one's disposal.

このことから分かる通り、本動詞‘HAVE’は基本的には目的語を伴って、「（目的物を）手の中に持っている」の意味の用法が最も基本的なものである。さらにこの基本的な用法が、より抽象的な目的物にまで適用されるようになり、「手に持っている」ということから、「手以外の場所で、具体的なモノを持っている」という用法へと広がる。さらに具体的なモノの所有の意味が薄まると、自分の愛情や注意を向ける対象としての「家族、友人、ペットなどを持っている」ということへ広がり、目的語がさらに抽象的になると、「特徴、知識、時間、病状、感情、考えなどを持っている」や、「恋愛対象としての相手を手に入れる」というような意味でも使用されるようになる。

さらにここから、主語の拡張が起こり、人以外のモノが特徴を持っている」という用法へと広がりを見せる。

(1) A year has twelve months.

このような用法は、日本語の感じからすると不自然な印象を抱くが、その理由に関しては詳しく 3 章（5）③で述べることにする。

今度は主語ではなく目的語の抽象度が高まって、それがモノでなくことがらになってゆくと、「これから先の予定や、やるべきことを持っている」という使い方が生じる。このことから、「～しなければならない」という義務の助動詞的な使用へとつながる。

(2) I have to go now.

(3) You have to try this chocolate cake.

「手に持っている」という意味から、「ある状態になったモノを持つ」という意味に広がり、「モノをある状態にしておく」という用法につながる。

(4) I want you to have your room tidy.

さらには、目的語が別な動作主によって「～された、または、してもらった状態のモノを持つ」という意味へと広がる。これは「読んでもらう」という場合「読む」という行為を自

分が所有するようになる、行為の所有と考えられるものである。ここから、使役動詞としての用法「～させる」へとつながる。

(5) I had my shoes shined.

このように、「以前にある状態になったモノを持つ」という考え方から、「以前に変化した結果の状態を現在持つ」ということとなる。以前に状態変化が起こり、その状態が発話時現在まで続いているという完了の概念の表現へと広がってゆく。完了表現では「持つ」という意味で‘HAVE’が使われ、以前に変化が起こったという意味で動詞の過去分詞が使われているのである。

また、これまでの拡張は「持っている」つまり、手にした状態にあるという原義によるものであった。そこから、手を伸ばしてモノを取る動作に焦点が当てられた拡張も確認できる。つまり、「手に入れる」と言うような動作の意味である。

(6) Please have a seat.

そこから、抽象的な目的語にまで使用が広がり、「飲食物やこども、情報、体験などを手に入れる」というような意味が加わる。また、一般的な文脈では‘HAVE’は状態動詞に分類され、その多くの用法は進行形にしづらいものであるが、ここで述べているような動作動詞に近づいた用法では比較的進行形にしやすい、ということにも触れておきたい。そのことに関しては3章(5)③で述べることにする。

(7) I am having breakfast.

(8) She had her first child at 34.

(9) May I have your phone number?

(10) Have a nice day!

このように、本動詞‘HAVE’は目的語の抽象的なものへの広がり、動作への広がり、使役表現への広がりを見せている。以上述べてきたような語義の広がり、OEDによっても時系列的に確認することができる。同様に、助動詞としても以下のように意味の広がりを確認することができる。

24. The present tense of *have*, forms a present of completed action, or ‘present perfect’.

24.a. To a trans. vb. With object. Here in origin and form belongs *I have got*, colloquially used for *I have*

24.b. Extended to verbs of action without object.

24.c. Extended to intransitive verbs generally. Used at an early date with *been*, *pa. pple.*, of BE, and hence with the passive voice. With verbs of motion later, partly displacing *be* as auxiliary.

24a では、まだ本動詞に近く、目的語を伴う形の用法となっている。OED での初出の例は 832 年のものである。(Dis ...ðet ic beboden hebbe in ðisem gewrite.) このような用法から ‘I had my shoes shined.’ のような使役動詞としての ‘HAVE’ への拡張が起こったことは十分に理解できるものである。やがてそこから使用の拡張が起こり、24b や 24c のような用法が出てくる。ちなみに OED における最も古い用例は 24b については 1175 年 (*Lamb. Hom.* We habbeð bigunnen ou to seggen ... hwat bi-queð ðe crede.) 24c の用例は 1205 年 (*Lay. 8325 Twien Þu hafuest ibeon ouer-cummen.*) である。24a の段階では ‘HAVE’ の文法化の度合いが低いため、本動詞の典型的な用法同様、目的語を伴ったものである。

(11) I have my homework finished.

このような使い方は、24a の用法である。過去のある時点において、ある状態になった目的物を所有している、という意味合いになり、完了形にかなり近づいていることがわかる。それから年月の経つうちに、文法化の過程で、誰がその結果をもたらしたのか、という点を問うことから、「～によって」という動作主の存在に注目する捉え方をすることによって、結果の状態を形容詞的に捉えるのではなく、行為を表す動詞の意味の場所に過去分詞が格上げされて現在の完了表現の語順になったものと推測できる。こうしてこのような語順が保たれたまま、以前に状態変化が起こり、その状態が発話時現在までも続いているという完了の概念の表現へと広がってゆく。

これまで、‘HAVE’ の中核的な意味から、完了表現やその他のさまざまな用法への意味の広がりを見てきたわけだが、鷲尾、三原 (2000) は、このような本動詞 ‘HAVE’ の意味を「非意図的所有」と表現している。もちろん、「手に入れる」動作からの広がりを見ると、‘HAVE’ の意味の中に意図が無いとはいえないが、完了表現で使われる助動詞としての用法は、「持っている」状態からの派生だと考えられるのでこのような表現が妥当であると言えるのである。

(12) I have two sisters.

(13) We have a lot of crows around here.

より典型的な用法の例文(12)では、姉妹がいるというのは、主語の意図的な行為によるものではない。中心的な用法からは少しはなれた例文(13)でも、からすが多いのは主語の意図によるものではない。このことから、単なる「所有」ではなく、「非意図的所有」と言えるのである。

(2) 日本語の「～テイル」表現

日本語の中には、英語の完了相と完全に意味領域が一致するような概念や表現がないため、自然な日本語に訳そうとした時に、誰しも難しさや不自然さを覚えた経験があると思う。それは鷺尾、三原（2000:183）が示しているように、英語の完了表現の中には日本語の「～タ」に対応していると考えられるような場合と、「～テイル」に対応していると考えられるような場合とがあるからである。さらに日本語の「～テイル」表現で表されるものの中には、英語の完了表現だけでなく、進行表現も混ざっているため、より一層煩雑に感じられるのである。「～テイル」の意味に関して寺村（1984:125）は以下のようにまとめている。

- (a) 動作や現象が継続していることを表す場合
- (b) ある過去（以前）の出来事が終わって、その結果がいまある状態として残っていることを表す場合

このうち (a) は典型的に英語の進行相と対応するような場合であり、(b) は英語の完了相と対応するような場合であると考えられる。(a) と (b) との共通点は、過去の変化が、現在にまで影響力を及ぼしているという点であり、(a) はその変化が過去の時点に始まった、ということで、(b) はその変化が過去のある時点でし終わり、それによる影響のみが依然として続いているということである。具体的に例を挙げると以下のような文が考えられる。

(14) 今雪が降っている。

(15) もう雪が止んでいる。

(14)では降雪という変化が過去の時点に始まり、依然として雪が降り続いているということであるのに対し、(15)は降雪という変化が過去のある時点で終わっている、つまり雪が降り止み、止んだ状態が現在まで続いていることを表す。また、より詳細に見ると、(b)の中には2種類の視点がある。

(16) コンサートはもう始まっている。

(17) オーストラリアには以前 3 対 0 で負けている。

例文(16)は、過去のある時点にコンサートが始まって、現在コンサートの最中である、というように現在の状況を述べることに主眼を置かれた表現と考えられる。それに対して例文(17)は、過去のある時点に試合をして負けたということを述べているのであって、現在のことも、過去の事実の主眼を置いた表現と考えられる。ただし、2種の表現のどちらもが究極的には過去の基準となる時点の影響が現在にまで残っている、ということを表しているのであって、どちらに重点が置かれるのか、というのはあくまで段階的な問題である。さらに同じ動詞を使っても、過去に傾くか、現在に傾くか、ということは話し手の捉え方や聞き手の

解釈の仕方、使われる文脈に拠るところが大きい。そして両方の意味を微妙なバランスで併せ持っているからこそ、表現としての意味の広がりを楽しむことができるのである。

「～テイル」表現が上記のうちのどのような意味に使われたのか、または解釈されるのか、ということについては、動詞自身が持つ性質に拠るところも大きい。つまり、「降る」をはじめとして「読む」「歩く」「作る」などというような、ある一定期間継続するような種類の動詞は、動詞本来の意味に継続性が含まれているので、動作の継続を強調する形で進行表現と考えられるため (a) の用法になることが多い。ただし、一見進行の意味と一致しないような動詞も、文脈や話し手の解釈の仕方によって進行表現として自然に使われるような場合がある。それらの表現については3章(5)で議論することにする。反対に「止む」や「消える」「(場所に) 着く」「(電灯が) 点く」などのような動詞は、いづれも瞬間的に起こることなので、その動作自体の継続とは一致しない。そのため、動作自体は瞬間的に起こっているが、影響力の持続という解釈が成り立ち (b) の用法になることが多い。また、動詞の意味による分類などの一般化は、ある程度までは便利な場合もあるが、文脈から切り離れた形で動詞の性質のみに頼った分類はしばしば、現実の状況を正確に捉えないことが多いのもまた事実である。それはわたしたち人間が、ことばという有限個のものから、無限の創作をする可能性を秘めている存在であり、ある種の言語的効果を期待して、意図的に規範から逸脱することが起こりうるからである。ここで、同一の動詞であっても、複数の用法の解釈が可能な例を挙げてみる。

(18) 父はもう起きている。

(19) 父は最近、ランニングをするために朝早く起きている。

上の例文(18)では、過去のある時点において父が起床し、それ以降発話時に至るまで父がずっと起きた状態のままである、ということを表した結果持続の文と解釈される。一方例文(19)では、長い間続いている習慣ではないものの、一定期間のうちにいくらかの反復をしているということになるので、動作の連続、つまり動作持続と解釈される。この場合には、限られた期間であることを示す表現が必要な場合が多く、このような習慣的動作を、現在時制の表す個人の習慣と区別して Leech (1975:32) は ‘HABIT IN EXISTENCE OVER A LIMITED PERIOD’ としている。個人の習慣が現在時制で表現される場合には、その習慣がいつ「始まる」のか、いつ「終わる」のか、というような動的な感覚はなく、ただずっとそれが続いているということを表しているだけなのである。

(20) 弟は今新聞を読んでいる。

(21) 弟は就職試験のために、このところ朝食前に新聞を読んでいる。

例文(20)では、発話時現在新聞を読むという動作が進行中であるという、動作持続を表したものである。それに対して例文(21)は、「起きている」の例文と同様に限定された期間内の反

復的な動作（習慣）を表したものであると解釈されるのが普通である。

(3) 完了相と進行相の相関図

今日の英語教育は、さまざまな項目を断片的に提示しているという印象を否めない。そのため、本稿では表現と意味とのネットワーク、同一語内の意味間のネットワーク、同一語を使った用法間ネットワークを提示する試みを行う。そのような目的から本稿では「完了」「結果」「継続」「経験」という従来の完了相の分類を離れ、本動詞‘HAVE’の意味を完了相に取り込む形で、鷺尾、三原（2000）の「所有」を取り入れた分類を採用したい。ただし、鷺尾、三原（2000:180）は伝統的には完了相とされる日本語の「タ」を過去時制であるという立場をとっているため、以下で引用する表2では「過去時制」と表記されている。また、ここでの「所有」とは、日常の意味での「所有」とは意味が異なるものである。つまり、「人が持っている」というだけの意味にとどまらず、「人、モノ、さらには状況に、あるモノや状態が備わっている」というような意味の解釈が必要である。つまり‘HAVE’は、所有や場所の近接、全体のうちの一部、因果関係など、一種の近接性を表すものである。そして‘BE’は、主語の特性、主語があるモノと同一の特性を持つ、というような広義の同一性を表すものである。

（3章（4）参照）しかし、‘HAVE’の意味する「備わっている」という状況を端的に表す語句には、どれも一長一短があるため、便宜上「所有」という表現を踏襲することにしたい。またこのような分類は、あくまで便宜的なものである、ということも忘れてはならない。そもそも表現の用法は整然とグループ分けできるような種類のものではなく、段階的に広がっているものである。従って周縁的な用法や、話し手や聞き手の解釈によって、複数の項にあてはまると思われるような用法が多数存在するということが、十分に想定できる。本稿ではその中でも典型的なものを示したつもりであるが、学習者はしばしば、完了表現がこの分類項のどれか1つにあてはまるものと了解しやすいので、提示には注意が必要である。

表2. 英語の相と日本語の相

英語		日本語	
完了相	過程所有（完了） I've already finished the homework.	過去時制	タ もう宿題をやった。
	結果所有（結果） The train has arrived at the platform. 状態所有（継続） I have lived here since 1980. 効力所有（経験） I have been to Kenya.	持 続 相	結果持続 窓ガラスが割れている。 状態持続 わたしは転職を考えている。 効力持続 漱石は多くの作品を遺している。 動作持続 犬がほえている。
進行相	動作持続 She is reading a comic book.		

鷺尾、三原（2000:183）例文は筆者。

① 過程所有

過去に行った動作が影響を及ぼして、これからの様々な状況と過程的に結びついてゆくこと。例えばこの場合には、宿題を終わらせてしまっているという事態から、その先の、これから遊びに行ける、とか夜に見たいテレビ番組を見られる、といったようなことにつながってゆく、ということである。

② 結果所有

過去の時点に変化が起こり、それから発話時に至るまで、その状態のままであること。この場合には主語‘the train’の場所の変化である。つまり、過去のある時点において（折り返し始発の）電車が移動してホームに入ってきて、今でもまだそこに停まっている状態のことである。

③ 状態所有

過去の時点に始まったある状態がずっと持続し、発話時にもその状態のままであること。この場合には、1980年にそこに住み始めて、それから発話時の今現在までずっと同じ場所に住み続けている、ということである。

④ 効力所有

過去に行ったことや終わったことであるが、その効果だけが発話時に至るまでずっと続いている状態であること。この場合には過去にケニア旅行をして、それ以降はケニアについての知識がある状態が今でも続いている、ということである。

⑤ 動作持続

ある限定された期間に起こるような動作の持続のことであり、典型的には動作動詞を用いた動作の持続のことである。この場合には、主語が、いつも漫画ばかり読んでいる、というような性質や生活習慣などではなく、この何分か、または何時間かという限られた時間内において、漫画を読むという動作が続いているということである。

⑥ 結果持続

何らかのことが原因で、過去にある結果がもたらされ、現在までその結果の状態が続いていること。この場合は例えば、こどもたちが遊んでいた野球のボールが当たって窓ガラスが割れてしまい、発話時点でも割れたままになっている、ということ。

⑦ 状態持続

これは結果持続のように、過去の時点において明白な変化が起こってその結果が持続して

いる、というわけではない。心理状態などが（普段とは異なるような）ある状態のまま、一定期間続いているというようなことである。この場合は主語が、転職を頻繁に繰り返し、いつも転職のことばかり考えている、というような主語の性質を表しているのではなく、この最近（という限られた期間において）転職を考える状態が続いているということである。

⑧ 効力持続

過去に行ったことや終わったことが、発話時に至るまで影響を及ぼしている、ということ。つまり夏目漱石が多くの作品を書き、そしてこの世を去ったのは過去の出来事であるが、例えばその作品が今でも多くの人に読み継がれている、とか現代の多くの作家に影響を与え続けている、というような効力のみが発話時にもまだある、ということである。

⑨ 動作持続

ある限定された期間に起こる動作の持続のこと。この犬はずっとほえ続けているわけではないが、例えば目の前を子猫が通りかかった、など何らかの理由から、発話の瞬間をはさむその前後のある一定期間だけ、ほえるという動作を行っていることを表す。習慣的な反復行動を表す現在時制とはこの点が異なる。

3. 進行相

Leech（1987:19）は、現在進行表現を現在時制表現と区別するために、現在進行表現を以下のように記述している。

the temporary situation includes the present moment in its time-span, stretching for a limited period into the past and into the future.

これを現在進行に限らず、進行相全体として一般化するならば、進行相が表すのは、発話時点を含むその前後（発話時点より以前から、発話時点以後のある時点まで）の一定期間内に継続している動作や状態変化というように言えよう。さらに Leech（1987:19）は進行相の特徴を3つ挙げている。

- 1 The Progressive Form indicates *duration* (and is thus distinguished from the non-durative 'instantaneous present')
- 2 The Progressive Form indicates *limited duration* (and is thus distinguished from the 'unrestrictive present')
- 3 The Progressive Form indicates that the *happening need not be complete* (and

is again thereby distinguished from the ‘instantaneous present’)

次にこれらの項目をひとつずつ取り上げる。

(1) Duration

1 つ目の項目は、単純現在表現の瞬間的なことがらを表す用法との対立である。単純現在のこのような用法は、言語化しようとしていることと、言語化がほぼ同時に起こっているような場合である。動きの速いスポーツの実況中継や演劇の解説など、ごく限られた場合に用いられるものである。進行表現では、動作の継続が表される。その例として以下のような対立を挙げている。

(22) *I raise my arm!*

(23) *‘I am raising my arm!’* (Leech 1987:19)

(24) Your daughter resembles you.

(25) Your daughter is resembling you year after year.

単純現在表現の例文 (22) は、挙手の動作を一瞬のことにように捉えられていることを示す。一方例文 (23) のように現在進行表現を使うと、手を挙げようと思って体を動かし始めてから、意図した高さまで手が挙がって動きが止まるまでの一連の動作を、ある程度の長さの期間のことがらと捉えていることが示される。また、一般的に長い間一定の状態を保っていることを表す状態動詞は、進行相の動作の継続とは矛盾すると考えられ、進行表現になりづらいと考えられることが多いが、状態の変化に焦点が当てられると、そこに動きが認められ、進行表現が可能になる。状態動詞‘resemble’の例文については、長年の知人の娘の特徴を述べていると考えると、瞬間性は見出せないが、例えば 2 人が一緒に写っている写真などを見て感想を述べるような場合には、見ることと、言語化がほとんど同時に起こっているとも解釈できる。それに対して例文 (25) のように進行表現を使うと、何年も見ている間にどんどん似てきている、というように、人の顔のゆっくりとした変化を動きとして捉え、似ている度合いが高まっている様子を表現することができる。このような「変化」が、状態動詞が進行形に使われる場合の条件となる。「変化」の条件を満たしているからこそ、以下のような状態動詞の進行表現が可能になるのである。

(26) ‘Your soup is tasting better every day.’ (久野、高見 2005:1)

言い換えると、「変化」の条件を満たせば、状態動詞も進行表現になりうるということである。しかしその条件を満たすことができるかどうかは、動詞自体の持つ意味に左右される部分も大きい。

例文 (26) の場合には、毎日上達して、味に日々変化があるという意味を表現することができている。進行表現に「継続」の意味があることは、すでに述べた通りであるが、ここで以下の文を考える。

(27) He is jumping.

この場合、最も一般的な文脈は、主語が何度も跳躍を繰り返している場面である。(もっとも、今まさに跳ぼうとしている瞬間や、ビデオをスロー再生にして1度の跳躍の継続を表すことも可能ではあるが。) これは厳密にはひとつの動作の反復であるが、ひとつひとつの跳躍に焦点を当てるのではなく、繰り返しの動作全体を捉えると、ひとつひとつの区別があいまいになり、一連の継続と解釈されるようになる。それはちょうど砂のような小さい粒も、小さくなって集まると連続体のように捉えられるのと同様のことである。したがって、文法書の中には継続と反復を区別しているものもあるが、本質的にはこの2つは同じことだと考えられる。このような反復の意味を持たせることによって、特殊な効果を期待する用法がある。

(28) He is always complaining about anything.

「いつも」というような意味の副詞句を伴うことで反復の意味が強調されると、その反復に対していらいだちや軽蔑の意味を持たせることができる。また、このような例から、進行表現が‘jump’の場合のように完全に継続的なことがらだけでなく、断続的に繰り返し起こることがらにも用いられるということが確認できる。

また、動作の反復が言語化される場合、‘jump’のように同じ動作を同じ動作主が行っている場合だけでなく、複数の動作主によって同じ動作がなされる場合もある。

(29) The guests are coming into the hall.

このような表現では、ある動作主による一連の動作ではなく、人が次々と到着しては入ってくるその一連の流れを大きな動きとして解釈していると考えられる。この場合も厳密には1人目が入ってくるのと、2人目が入ってくるのが完全につながっているわけではなく、ほとんどの場合には少しの間が空いているような断続的な動きであると考えられる。しかしこのような表現がなされると、ひとりひとりの動きに焦点があてられるわけではなく、粒の小さくなった砂同様、まるでそれがひとつの連続した動きを形成しているかのように解釈されるのである。

(2) Limited duration

2つ目の項目は現在時制表現の、いつからいつまで、などというような期間を限定しない、あらゆる時点においても成立するようなことがらを述べる用法との対立である。このような、はじまりと終わりがはっきりしないという点も、状況自体に内在する客観的な特徴ではなく、

あくまでも話し手の捉え方の問題である。

(30) 'I *enjoy* the seaside.'

(31) 'I *am enjoying* the seaside.'

(32) 'I *live* in Wimbledon.'

(33) 'I *am living* in Wimbledon.' (Leech 1987:20)

例文 (30) のように単純現在表現を用いると、主語の人生の中で海岸を訪れることが度々あり、その毎回を楽しんでいるという意味になり、訪問の各 1 回は（何日間か、ある程度長い期間滞在していたとしても）人生の中の一瞬の出来事のように捉えられていると解釈できる。それに対して例文 (31) のように現在進行表現を用いると、今現在海岸を訪れていて、その滞在の最中であるという意味合いになり、1 度の滞在のことしか述べておらず、さらにその滞在を瞬間的なものではなく、ある程度の時間的長さを持った期間として捉えていると解釈できる。また、状態動詞の文についても同様の対立が見て取れる。例文 (32) の単純現在表現では、長い間そこに住んでいるので、いつからいつまで、などという期間は問題ではなくなっていると解釈できる。それに対して例文 (33) の進行表現では、普段は別なところを主な居住地にしているのだが、何らかの理由でここ最近だけ Wimbledon に住んでいる、というような意味が表され、その期間が強調されるようになる。

(34) 'I TAKE *dancing lessons*.'

(35) 'I'm TAKING *dancing lessons*.' (Leech 1987:32)

このような 2 文を比較すると、例文 (35) の進行表現の方が例文 (34) の単純現在表現よりも期間が短いことを意味する。このような用法を（短い）一定期間の習慣として Leech (1987:32) は 'HABIT IN EXISTENCE OVER A LIMITED PERIOD' としている。このような特定の期間の習慣を表す用法が日本語「～テイル」表現でも同様に表現できることは、すでに述べた通りである。さらに、以下のような例文を比較することによって、進行表現の持つ「特定性」をより明確に感じ取ることができる。

(36) 'I *enjoy* music.'

(37) 'I'm *enjoying* the/*this* music.'

(38) '*I'm *enjoying* music.' (安藤 2005:113)

まず例文 (36) の単純現在表現では、主語の音楽好きな性質を述べたもので、人の性質は簡単に短い時間で変わるような種類のものではないため、現在時制表現で表されると解釈できる。例文 (37) や (38) のような現在進行表現では、現在を含む限定された期間に継続中のことを

表すので、この場合は今現在ある特定の音楽を聴いている最中ということになる。それにより、単純現在表現における‘music’のように、広く一般的な概念としての音楽ではなく、話者の心の中にはある特定の音楽が思い浮かべられている、もしくは想定されているため、限定する語句をともしなければならぬのである。例文 (38) を安藤 (2005:113) は誤文としているが、これは誤文というよりは、文脈が異なると考えた方がよいだろう。例えば音楽好きな人と知り合いになり、その人の影響で、それまでは音楽に全く興味のなかった自分が音楽を聞くようになっていて、というような場面を想定すれば、そこには状況の変化が見出されるので、このような表現も十分に機能するはずである。

(39) ‘*Whenever I visit him he MOWS his lawn.*’

(40) ‘*Whenever I visit him he is mowing his lawn.*’ (Leech 1987:32)

例文 (39) の単純現在表現では、いつでも成り立つような彼の習慣的動作を述べたものである。それに対して例文 (40) のように進行表現を用いると、主語が彼を訪問するということが反復している、ということよりは、主語の 1 度の訪問の時点を基準時点として、その前後で芝刈りという動作が継続している、という意味合いになる。また、この場合には ‘Whenever’ という頻度の高さを表す語があるために、すでに述べたように彼の芝刈りばかりしていることに対して、軽蔑しているような話者の気持ちを表現することもできる。ただし、それよりも頻度の下がる副詞や副詞句は、進行表現の反復の意味合いと一致しないため、使われにくい。

(3) Possible incompleteness

3 つ目の項目は、1 つ目と同様に単純現在表現の瞬間的なことがらを表す用法との対立である。

(41) ‘*The bus stops!*’

(42) ‘*The bus is stopping.*’

(43) ‘*I read a book that evening.*’

(44) ‘*I was reading a book that evening.*’ (Leech 1987:20)

例文 (41) の単純現在表現では、発話と（おおよそ）同時にバスが停止するという意味合いから、「バスの停止」ということがらを、話し手が瞬間的に捉えているということが表される。それに対して例文 (42) のように現在進行表現を用いると、発話時に「バスの停止」の完了は求められていないので、だんだんスピードを落としてきている、今まさに止まろうとしている（けれどもまだ完全に止まってはいない）というような意味になる。例文 (44) の過去進行の例についても、Leech (1987:21) の説明によれば以下の通りである。

The Simple Past here suggests that the speaker reached the end of his book before the end of the evening; completion in this sense is not implied by *was reading*.

このような記述を見ても明らかなように、進行表現の持つ未完了の意味は、過去時制において、より明らかに感じ取ることができる。

Leech (1987:19) は進行相を使うことによって、ある事態を話し手が引き伸ばしたり (‘stretch’)、圧縮したり (‘compress’) して解釈している、と述べている。一見すると、同一の表現に対して、正反対の操作をしているように感じられる。上記の項目ごとの例文に立ち返ると、1つ目の項目の例文 (22) では、単純現在表現では一瞬のことがらを現在進行表現を使うことによって、動作がある一定期間続いているように時間を引き伸ばしていると考えられる。また、2つ目の項目では、例文 (30) の単純現在表現では海岸への訪問回数が複数であることが含意され、その1度ずつの訪問に焦点が当てられているわけではない。つまりカメラワークに例えれば、ずっと遠くから、全体像を写しているようなものである。それに対して例文 (31) の現在進行表現では、1つの訪問 (現在進行では今回の訪問) に焦点を合わせているようなことで、1度の訪問の時間的長さを十分に感じることができる。このことから、1つ目の項目同様に、瞬間的にも表現できることがらの時間を引き伸ばしていると考えられるのである。さらに、*mow* の例文でも、例文 (40) の方は主語の訪問の1度ずつに、時間的な幅が持たされているのを感じ取ることができよう。一方状態動詞の進行表現を見てみると、本来はあまり変化のない人の性質や状態であるはずのことがらに程度の変化を見出すことによって、始まりと終わりのある、一定期間しか継続しない動きへと圧縮されていると考えることができる。

進行表現の持つ未完了の意味合いから、未来のことがらへの進行表現の使用を説明することができる。このような用法は、現在の学校文法ではあまり扱われなかったり、進行形から切り離されて未来表現のまとまりとして扱われたりする傾向がある。しかし、形が現在進行形と同じなのだから、現在進行形と同じ事象を表していると考えるのが妥当である。動作持続と未来表現との橋渡しをするために、以下の文を例とする。

(45) She is reading a comic book.

(46) The company is building a tower.

例文 (46) は、例文 (45) に比べて、何日もにわたる比較的長い期間を表したものである。「タワーを建てている」とひとくちに言っても、マンガを読む動作とは異なり、その期間内には様々な段階が想定できる。例えば、設計を考えている段階、土台の基礎工事を行っている段階、骨組みを作っている段階、室内装飾を行っている段階、などが考えられ、話し手や聞き手がこの文に対して想定する段階は、文脈に拠るところが大きい。しかし反対に、どの段階

をとってみても解釈は可能なわけである。したがって、ある行為の計画段階から、実際の途中の様々な段階はひとつの連続だと考えられる。このことから、現在進行形がごく近い未来を表現することにつながっているのである。そして発話時の段階ではまだ未完了の状態なのである。この場合は、例でも示した通り、現在から計画が進行しているような、未来において実現の可能性が極めて高い状況でしか使われない。さらに計画をするということは、そこに何らかの意志が存在するはずであるから、鷲尾、三原（2000:143）は現在進行形で表すことのできる未来を、「近い未来において起こる（正確には「起こす」）ことが確実な、意図的な計画に基づく行為」「発話時現在において「決定済み」（predetermined）の行為」としている。意志に基づく確定的なことがらの典型として、個人的な近い未来の予定がしばしば現在進行形によって表されるのはこのためである。

また、すでに述べたように、鷲尾、三原（2000:141）は進行相の意味を総括して「限定的継続」としている。これは Leech（1987:19）が‘limited duration’としているものである。しかし進行相の意味としてさらに正確を期すならば、完了相との区別という意味でも、上で挙げられているように進行相が動作の完了を要求しないという点を合わせて、「未完了動作持続」とすることができるのではないかと考える。

(4) BE' の移り変わり

‘BE’が進行形表現を形成するのに使用されるようになった経緯を考えるために、まずは瀬戸他編（2005:85-86）の意味ネットワークを基に、‘BE’の意味を明らかにしたいと思う。‘BE’の中心的な意味は、「ある場所に存在する」という意味である。

(47) Your key is on the table.

OEDによっても、最も基本的な意味として以下のように規定している。

1. To have place in the objective universe or realm of fact, to exist; also, to exist in life, to live.

「存在する」つまり、「ある・いる」という意味を共通項として、場所に比べて抽象度が高まる時間へと使用が広がり、「ある日時にある」という意味で用いられるようになる。ちなみに場所に用いられる表現が時間に転用される現象は、しばしば見られることである。

(48) The match is on the next Saturday.

「場所・時間にある」からさらに抽象度が高まると、「ある状況・状態にある」という意味が出てくると共に、変化の意味合いが加わると、「ある状態になる」というような意味でも使用されるようになる。

(49) The class is over.

(50) I want to be a police officer.

このような用法はOEDでは以下のように記述されている。(ただし初期の用法では、‘let be’の形が取られている。)

4. To remain or go on in its existing condition.

「ある状況にある」ということから、主語がある状態にある、ということになり、「主語の特性」を表すのに用いられるようになる。また、「主語の特性」の一種として、「主語があるモノと同一であるという特性を持つ」場合にも使用される。

(51) She is pretty.

(52) She is my sister.

主語がある状態にある、というところから、主語が進行中の状態にあるということ、つまり進行相を表すために、現在分詞を伴って‘BE’が助動詞的に使われるようになったわけである。同様に過去分詞を伴った形で、「～された状態ある」という受動用法にも用いられるようになっている。このような用法についてはOEDの以下のような記述からも明らかである。

15. With the present participle, forming continuous varieties of the tenses.

- a. with *active* signification. In OE. only *wæs* was so used, forming a kind of imperfect; the present was in use by the 13th c. In later times this was confused with a formation upon the vbl. sb., of which see examples under A *prep.* 13; the OE. *he wæs feohtende*, and ME. ‘he was a-fighting’, meet in the modern ‘he was fighting’.
- b. with *passive* signification: in such expression as ‘the ark was building,’ the last word was originally the gerund or verbal substantive, and the full expression was ‘the ark was a-building or in building,’ of which see instances under A *prep.* 12.
- c. The ambiguity of the construction ‘is building’ in the two preceding senses has led in modern Eng. to the use in the latter sense of ‘is being built, formed upon the present pple. Passive ‘being built.’

これまでの変遷過程では、この2つの混同があったようであるが、現在では以下のように、現在分詞と過去分詞を使い分けることによって用法が定まっている。

(53) She is playing the piano.

(54) The piano is being played by her.

(5) 状態動詞の進行表現

従来進行表現になりにくいとされている動詞が、進行表現で使われるのはどのような場合なのか、どのような要素が読み取られると進行表現が可能になるのか、例文を挙げながら観察する。状態動詞の分類には Leech (1987) が進行表現になりづらいものとして挙げているものを使用する。ただし、動詞によってもその使い方によって複数のグループに属する可能性がある場合もあるし、周縁的で分類がしづらいものもある。ここでは動詞を分類してそれぞれのグループ内の動詞の振舞い方を規定しようとしているわけではない。動詞の意味性質を大きくまとめて、それらが進行表現となって現れたときに、どのような解釈がなされた結果なのか、という点に焦点を置くものである。

① Verbs of inert perception

このグループに属する動詞は、外的な刺激を受けて感じられるような人間の五感によるものである。

(55) It tastes sweet.

(56) 'Your soup is tasting better every day.' (久野、高見 2005:1)

(57) I am tasting the soup.

'taste'は動作性が低く、あるものの味を描写する状態動詞である。ところが例文 (56) のように日を追うごとの味の変化を述べるような場合には、その状態変化により進行表現が可能になる。つまりこのような進行表現になるための要件は「程度の変化」である。例文 (57) では'taste'の用法そのものが他の 2 つとは異なり、味の状態を述べるのではなく、味見をするという目に見える動作を意味する。よって動作であるから進行表現が自然に可能になる。

② Verbs of inert cognition

心理状況を表すもので、動詞自体に変化の少ない状態的な意味が含まれる。まずは、最近テレビコマーシャルでも使われる言い回しを含む以下のような例について考えたい。

(58) I love you.

(59) I'm loving it.

(60) 'I'm loving you more and more as the days go by.' (久野、高見 2005:16)

例文 (58) は、現在の相手に対する気持ちを述べたものである。例文 (59) や (60) のように進行表現を使うと、好きな気持ちがどんどん大きくなってきている、という心理状態の変化を捉えたものであり、ここでも進行表現になりうる要件は「程度の変化」であると考えられる。

(61) Well, I like it. But what do you think?

(62) You are so quiet. What are you thinking?

例文 (61) は、ある物事、例えば店に並んでいる品物やアイデアなど、に対する相手の考えを聞いたもので、ある考えを抱いているのは動作性の低いことであると同時に、一定期間をもって次々に変わるようなものではない。従ってこのような文脈では、単純現在表現を使う方が場面と合っていると言えるのである。一方例文 (62) は、発話時より少し前から、相手の口数が減ってきているのを見て、その期間に何かを考えているのだろう、と推測した疑問文である。進行表現となっている要件は「限定された期間の状態」であるという点である。

(63) 'I hope you'll give us some advice.' (Leech 1987:29)

(64) I am hoping you'll give us some advice.

Leech (1987:29) は例文 (64) のような進行表現について、進行表現の持つ 'possible incompleteness' (Leech 1987:29) の性質から、まだ変わる余地があり、あくまでも暫定的な状況、すなわち聞き手に断るという可能性を残した丁寧な表現であるとしている。

Progressive is a more tentative, and hence more polite method of expressing a mental attitude. (Leech 1987:29)

さらに仮定法過去 'I was hoping ~' 表現が最も控え目な表現であり、単純現在表現が最も直接的な表現であると述べている。また別な例として、以下のような対立を挙げることができる。

(65) 'I wonder if you can help me.'

(66) 'I was wondering whether you'd like to come to a party.' (OALD)

この2文についても、進行表現では仮定法が用いられているのは、興味深い点である。また、進行表現は、話し手が状況の中に身を置いている感じなので、ことがらに対する関心の高さや真剣さ、熱意などを表現することもできる。それに対して単純現在表現は、事実を淡々と描写している印象を与える。

③ State verbs of having and being

'be' や 'have' を中心とした「存在」や「所有」を表す動詞のグループである。この二つが同

じグループにまとめられるということは、「存在」と「所有」との間に何らかの関連性があるということである。まずそれを証明するために以下のような場合を考える。

(67) (わたしには) 姉が二人います。

(68) I have two sisters.

日本語で「わたし」という主語を出すのは有徴的な感じになるため () 書きにした。例文 (67) は「姉が二人いる、という状況」を述べたものであるが、例文 (68) は「わたしが所有する」という極めて人間中心の表現で「誰が～する」という構造になっている。また、「アル」という「存在」の動詞を使ってもやはり「所有」を表すことができる。

(69) からすは山に七つの子があるからよ (童謡)

一方英語では、動作主を立てて、その「動作主が～する」表現に傾く傾向がある。動作主の典型は人間であるから、やはり人間中心の視点が取られていると言える。そしてそのような用法が拡張し、積極的な動作をしない、つまり動作性の低いものにまでこのような表現形式がとられることがある。それが以下のような用法である。このような両言語の志向の違いも興味深い点であるが、「存在」と「所有」のからみ合いを観察すると、この2つの関連性の深さを感じることができる。

(70) A week has seven days.

日本語で逐語訳をすると、「一週間は七日を持つ。」となる。確かに内容が理解できないことはないが、とうてい自然な表現とは言えず、実際に使われればかなり技巧的な印象を与えることになるだろう。このように英語では「所有」表現が「存在」表現に転用される傾向があるのに対して、日本語では「存在」表現が「所有」表現に転用される動きが見られる。

話を進行形に戻して、状態動詞の代表格とも言える‘BE’の対比から考える。

(71) She is kind.

(72) She is being kind.

例文 (71) は、主語の属性を述べる典型的な用法である。それに対して例文 (72) は、進行相の‘limited duration’の意味合いが加わり、何らかの理由で、例えば意中の人に良く見られたいから、とか次の選挙で票を集めたいから、今だけいつもとは違う振る舞いをしているという意味になる。いつもとは違う振る舞いをするということは、さらに意味を広げると、本当は違うのにある状態を演じているということになる。

(73) ‘He is fool. (i.e. ‘He can’t help it – it’s his nature)’

(74) ‘He is being fool. (i.e. ‘He’s acting foolishly)’ (Leech 1987:29)

(75) The murderer was left-handed.

(76) The murderer was being left-handed.

例文 (74) にあるように、進行表現を使うことによって、例えばパーティーで場を盛り上げるためにひょうきんなことをしている、というような普段の彼の性質とは違う一時的なことであるという意味を持たせることができる。また、殺人犯についての表現では、例文 (75) のように単純過去表現を使うと、捕まった犯人の特性を述べたものである。一方例文 (76) のような進行表現を使うと、本来は右利きの殺人犯が人を殺す時に、捜査が自分に及ばないようにするために一時的に左利きのふりをした、という意味を持たせることができる。つまりここで進行表現になりうる要件は演じようとする「意図」であると言える。

次に‘HAVE’の例を挙げる。

(77) She is having a baby.

(78) She is having hysterics.

(79) She is having a headache.

例文 (77) は、今のこの期間だけ赤ちゃんがいるというような‘limited duration’の意味を読み込むのは普通に考えられる状況ではありえない。ここでは、赤ちゃんを持つという動作の最中であり、未完了のことがらである。そして近い将来においてこどもを持つことになっているということである。よってこの場合の継続とはつまり妊娠の継続という意味に解釈するのが自然であろう。例文 (78) では、普段は正常なのだが今だけ何かの心的ストレスでヒステリーを起こしているというような状態の継続と解釈できる。もしくはヒステリーに付随するような動作、例えば大声を上げるとか、体を震わせるなどといった動作の継続とも解釈できる。しかし、人をだまそうとしてヒステリーであるかのように演じているという意味を読み込むことも可能であり、どの意味になるかは、場面に拠るところである。例文 (79) の場合は、頭痛に動作性を見出すのは難しいので、頭が痛いふりをしている、という意味で使われることが多いと考えられる。

④ Verbs of bodily sensation

体内の刺激による感覚。3 章(5)①のグループは体外の刺激によって影響を受けるという意味のまとまりであったので、ここでは体内刺激としている。このグループの動詞の単純現在表現と進行表現に関して Leech (1987:26-27) は、以下のようにかなりあいまいな態度をとっている。

There is apparently a free choice, without change of meaning, between *I feel hungry*

and *I am feeling hungry*; between *My knee hurts* and *My knee is hurting*; etc.

進行相や完了相は、時制のように物理的な要因だけでなく、状況を解釈する人間の捉え方の影響を受けやすいものであるため、特定の場面でどちらの表現を使わなければならない、と規定されることは少ないであろう。また、母語話者が上記のような印象を抱く のだから、その印象は確かなもので、両表現の意味の差はごくわずかなものなのかもしれない。意味の差がわずかな場合には特に、まわりの語との響きの問題や個人の好み の問題で表現が選択される可能性も十分に考えられることである。しかし本当に意味の差が感じられないのだろうか。単純現在表現で「膝が痛い」と言った場合には、例えばお年寄りが慢性的な膝の痛みを抱えているような印象を受ける。進行表現を使うと、どこかにぶつけたばかり、とかブーツがきつくて、というような一時的な要因で「膝が痛い」という印象を持つことが可能なのではないかと考えるものである。

(80) I feel sick.

(81) I am feeling sick.

気分がすぐれない状況を言い表す場合に、このような対立を考えると、単純現在表現は状態を淡々と述べているような感じであるのに対し、進行表現を使うと、今まさに特筆すべき状況になっているのだという臨場感が出るので、本当に心から気分が悪いのだという印象になるように思われる。

(6) 英語の進行表現と日本語の「～テイル」表現

英語の進行表現と日本語の「～テイル」表現の意味範疇が必ずしも一致しない、ということはすでに見てきた通りである。英語進行表現と、進行だけでなく完了の意味も包括する日本語「～テイル」表現のそれぞれの特徴を考えたい。

英語の進行表現は、典型的には動作の持続を表すものだが、状態の持続にも用いられる。さらには、状態動詞でさえ、そこに何らかの「変化」が見出されると進行表現が可能になる。

(82) He is being kind to her.

このように、進行表現がどんどんその領域を広げていると考えられ、進行表現が動作的に傾く傾向にあると言える。それに対して日本語の「～テイル」表現は動作、状態の持続という進行表現の意味領域に加えて、過去に起こった変化の影響の、発話時に至るまでの持続という完了表現も含まれる。このような性質を考えると、「～テイル」表現が英語進行表現と比べると3章④で見たような‘BE’の元来の意味にかなり近い状態で、存在や状態を表す傾向が強いと言える。このような「動作的志向」と「状态的志向」は、英語と日本語の特徴の一端を現していると考えられる。

英語が「～スル」というような動作的志向を持っているということは、以下のような例からも確認することができる。元来人間の場所の移動を表す動詞である‘GO’や‘COME’が、状態の変化に転用されているものである。

- (83) He went red.
- (84) 彼は真っ赤になった。
- (85) The milk has gone sour.
- (86) その牛乳は腐っている。
- (87) That color has gone out of fashion.
- (88) その色はもう時代遅れになってしまっている。
- (89) She came to love him.
- (90) 彼女は彼を愛するようになった。
- (91) Everything will come right in the end.
- (92) 最後には万事大丈夫になるよ。

このような用法は枚挙に暇が無いが、いづれも「スル」的な動作の動詞が、「ナル」的な状態の変化を表すのに転用されている例である。(‘She went mad.’ ‘She came to herself.’のように、go は悪い意味で、come は良い意味で使われることが多いということも興味深い。) しかし日本語においては同様の転用はできない。「～ナッテイク」「～ナッテクル」という表現は可能だが、「ナル」抜きに表現することはできないからである。反対に、日本語「ナル」表現が「スル」的な場所の移動を表すような例を池上(1981:252)が以下のように挙げている。

- (93) 「お殿様ノオ成リ」
- (94) 「今ハ武蔵ノ国ニナリヌ。コトニヲカシキ所モ見エズ。」
- (95) 「関山ヲモウチ越テ、大津ノ浦ニナリニケリ。」

これらの動詞を‘become’や‘be’を使って表現するのは、できそうもないことである。このような、英語の動作志向的な性質と、日本語の状態志向的な性質は以下のような対比によっても感じ取ることができる。

- (96) 南十字星が見える。
- (97) “X” SEE THE SOUTHERN CROSS.

日本語話者にとって例文(96)は、一見変わったところのない素朴な表現であるが、英語話者にとっては、「誰が」見ているのか、という点が気になるようだ。現に「誰が」という主語“X”を明示しない限り英語表現を組み立てることはできない。ただしこの場合の“X”は、文脈によって独白であれば1人称であり、問いかけであれば2人称となるが、他人にはわからない、自分の感覚の問題なので3人称は不可能である。確かに英語においても、主語をぼかした形で“The Southern Cross is visible.”と表現することもできるが、受動態表現はそれ自体がかなり有徴的なので、同列に扱うことはできないものとする。日本語表現では見ている先の状況のみを言語化したままで、そこにある動作主の存在はかなり薄まっている。しかし英語の方は、動作主とその動作が明確に言語化されることが要求される。このようなそれぞれの言語の特徴を考えると、一見対応を見せていると思われる英語の進行表現と、日本語「～テイル」表現の意味の広がり方の方向性が、正反対であるということがわかる。つまり、英語の進行表現は意味の中心を動作に置き「動作から状態へ」意味の広がりを見せているのに対して、日本語「～テイル表現」は意味の中心を状態に置き「状態から動作へ」意味の広がりを見せていると言えるのである。

4. シャーロックホームズ内の用法

言語形式とその意味を考察する上で、文脈抜きに議論を進めることはできない。それは、一見文法規則にのっとっているような文であっても使われている場面にふさわしくない場合もあるし、また反対に、一般的なルールから逸脱していると思われるような表現であっても、その表現形式ならではの特殊な効果を発揮しているような場合もあるからである。したがって文脈の中における進行表現の使用を実際に観察することにした。

本稿では、世界中で最も良く知られた作家の1人と言えるであろう Arthur Conan Doyle の短編を資料として選んだ。推理小説を選んだのは、他の文学作品のジャンルに比べて日常会話に近い表現が使われていると予測できる点と、物語の筋の特質上、状況描写表現が多いのではないかと予測した点によるものである。日本語訳については土井(1958)を採用することとした。これは、翻訳そのものを文学作品として読者に提示する目的よりもむしろ、学習者が原典を読む手助けとなることを目的に書かれた翻訳で、他のものと比べてかなり原文に忠実な逐語訳だと判断したからである。

THE DANCING MEN

Holmes had been seated for some hours in silence, with his long, thin back curved over a chemical vessel in which he was brewing a particularly malodorous product.
(154:1-4)

ホウムズはもう何時間もの間黙りこんだまま、ひょろ長い、やせた背中を化学実験用の容器の上にかがみこませて、坐りこんでいた。その容器で彼はひどく悪臭を放つ生成物を造り出していたのだった。

ここでは、主節の部分で ‘for some hours’ と表された一定の期間中に動作が継続して起こっていたことを表している。対応する箇所訳においても「生成物を造り出していたのだった。」とあり、日本語の「～テイル」表現とも対応するような典型的な進行表現であることがわかる。はじまりと終わりがぼやけているような未完了の性質を持つ進行表現を使用することによって、話し手が進行中の状況の中に入り込んで状況を捉えている、つまり話し手の ‘internal view’ であると表現することができる。これはちょうど、姿の美しいとされるベイブリッジも、自分が橋を渡っている途中ではその全体像を見ることができないのと同じことである。自分が状況の中に身を置いてしまっているために、はじまりと終わりが見えていないということである。それによって、話者自身が状況の中にいて、出来事が目の前で起こっているかのような臨場感を出すことができるため、読者にも生き生きとした感じを抱かせることができるのである。

It is frightening her to death. (it とは踊る人間の絵のような暗号の手紙のこと)
(160:6)

妻はそれを死ぬほどこわがっております。

ここでは、怖がらせている原因のモノを主語として立てている。直訳したのでは日本語話者には不自然な印象を与える可能性が高いため、日本語の表現では人物が主語として立てられ、手紙は感情の原因のように表現されている。この場合は、人を怖がらせるような一連の行動の連続と解釈することができる。

I stopped at a boarding-house in Russell Square, because Parker, the vicar of our parish, was staying in it. (162:4-6)

ラッセル・スクエアの下宿に逗留しました。というのは、私共の教区の牧師のパーカーさんが、そこに滞在していたからでした。

ここでは、主語がその宿に行ったのを基準の時点として、牧師の滞在がその前後の期間に広がっていることを含意する。つまり、牧師の滞在の方が、主語の滞在期間よりも長かったことを示唆している。また、両方共同じ滞在という動作を表しているので、物理的には主語の滞在も点的なことがらではなく、期間があるということになる。しかし話者の心の中では、牧師の滞在は主語のそれと比較してかなり長いと解釈されたことがうかがえる。つまりどの

ような事態に対して進行表現を使うか、ということは、必ずしも物理的な性質と一致するものではなく、あくまでも話し手の捉え方次第なのである。

There is always a look of fear upon her face—a look as if she were waiting and expecting. (164:11-12)

彼女の顔にはいつも不安の色が—何かを待ち、予期しているような表情が浮んでいるのです。

‘wait’も‘expect’も、目に見える動作というわけではないが、発話時現在において彼女の心理がある特定の状態のまま持続している様子を表している。さらにこの表情は彼女の顔の特徴や、性格などではなく、ある手紙が届いてから始まった、限定された期間だけ浮かべる表情であることが分かる。

I was going out, when he called me back. “You had better stay here, Watson.” (170:4-5)

私が外出しようとする、彼は私を呼びとめた。「ウォットスン君、家にいた方がいいよ。」

この箇所は、進行表現の部分だけを読むと、主語がすでに家を出ていて外出中というようにも解釈が可能である。しかし、続きの部分を読むとそうではなく、発話時に、今まきに出かけようとしているところであったという意味であることがわかる。発話時にはまだ出かけていない未来のことなのであるから、このような用法は近接未来を表すものだと考えられるのだが、すでに述べた通り、近接未来というのは発話時以前から明確な意図を持って、例えば身支度を整えたり、地図で行き先を確認したり、というような準備が行われているような、広義の動作持続であると考えられる。

We had not long to wait, for our Norfolk squire came straight from the station as fast as a hansom could bring him. He was looking worried and depressed, with tired eyes and a lined forehead. (170:13-16)

私たちは長く待つにはおよばなかった、ノーフォークの地主君は、二輪馬車をできるだけ走らせて、駅からまっすぐに飛んできた。彼は、疲れた眼をし、額にシワをよせて、心配そうな沈み込んだ顔つきをしていた。

この箇所は、地主が話し手の待つ場所へやってきた時を基準の時点として、その時に心配そうな表情を浮かべるという状態が持続していたということである。この箇所は、過去の出来事として単純過去表現を使うことも可能であるが、こうして動作性の強い進行形を使うこ

とによって、動きの含意が増えるため、心配そうだと判断できるような動き、例えば、覇気の無い動きや、疲れた目をしばたかせている様子などを、より活動的で具体的に読者に思い浮かべさせる効果が期待できると考えられる。日本語の表現についても、単に「沈み込んでいた」と描写するよりも、「顔つきをする」という状況ではなく動作を表す述語を使うことによって、より進行表現の表す意味合いと近づけていると考えられる。

“It’s getting on my nerves, this business, Mr. Holmes,” said he, as he sank, like a wearied man, into an arm-chair. (170:16-19)

「ホウムズさん、神経がいらいらしてきますね、この厄介な問題には。」と彼は、疲れはてた人のように、どっかと肘掛けイスに腰を下しながら言った。

主語は、暗号文の手紙が妻を苦しめているようだというこの案件のことである。案件に物理的動作が認められるわけではない。ここでは時間が経つにつれてどんどん自分の神経が衰弱してくるという「程度の変化」を表すものである。「程度の変化」は「～テイル」ではなく「～テクル」や「～テイク」という表現でよく表されるものであるが、「～テイク」は‘GO’の感じなので、状況の継続と平行性が見られるが、「～てクル」は‘COME’を含んでおり、自分の方へ影響が来るという意味から、話し手が自らとの関連の深さを表現していると解釈できる。

but when, in addition to that, you know that it is just killing your wife by inches, then it becomes as much as flesh and blood can endure. (170:21-24)

ところが、それだけではなくって、それが自分の妻をじりじりとなぶり殺しにしてるんだということが分った場合には、生身の人間にはとても耐え切れないものになります。

‘kill’は瞬間的に起こる動作で、しかも大勢を順番に殺すというような状況でない限りは、そこに時間的な長さを持たせることは難しい。ここでは、このままの状態が進んでいけば確実に死んでしまう、というような現実にかかることの確実性の高い近接未来の用法であると考えられる。また、この妻を死に至らしめるまでの過程が、具体的な動作でないにしても、着々と進行している様子を表現することで、妻がだんだんと弱っていく状態の変化を読者は想起することができる。日本語の表現においても、実際に彼女の身体に傷を負わせる動作をしているわけではないが、何回にも分けて少しずつ彼女に心的ダメージを与える行為を一続きの動作のようにして捉えていると考えられる。

She’s wearing away under it—just wearing away before my eyes. (170:24-25)

妻はそのために次第にやせ衰えてゆきます—ほんとに私の眼の前でやせ衰えてゆく

んです。

この部分の‘wear’は彼女の能動的な動作ではない。彼女の状態を表したもので、現在分詞の名詞を修飾する用法にかなり近い表現であると考えられる。また、やせ衰えることに関連する彼女の外見上の変化、例えば目の周りにクマができてくるとか、ほほがこけてくる、などというような状態変化を思い起こすことにつながる。日本語「～テユク」表現や「～テクル」表現は「～テイル」表現と同様に進行表現に用いられるものだが、「イル」という存在の意味を含む「～テイル」表現のように完了形には用いられないことに加えて、「ユク」「クル」という移動の意味を響かせることによって、進行相をより強調することができるように思われる。ただし、先にも述べたように「～テユク」と「～テクル」には意味合いに差があり、この場合は話し手にとって、自分ではない人物の描写のため、自分への影響とは考えにくく、「～テユク」表現が用いられているものと考えられる。また、その時にその場で起こっていることがらの描写ではないので、話者と描写対象との間には心理的に距離があるため、「～テユク」表現の方が状況にふさわしいと思われる。

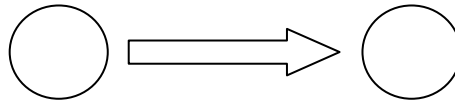
She has spoken about my old family, and our reputation in the country, and our pride in our unsullied honour, and I always felt it was leading to the point; (170:31-172:3)
妻は、私の古い家柄のことだの、あの州で一門が得ている徳望のことだの、汚れない家名の誇りだのを話題にすることがありました、その度に私はいつも話は問題の核心に進んで行くなと思いました。

この箇所は複数の時制と相が組み込まれている。はじめの現在完了表現は、彼女が発話時までの期間に何度かその話題について話しているということになり、次の過去時制表現では、彼女が話題に出すたびに、毎回必ずそう感じたという過去の反復的な出来事を表していると考えられる。最後の過去進行表現を考える上で必要なのは、主語‘it’は何を指しているのか、という点である。彼女が話を持ち出す状況そのものとも取れるが、おそらく英語話者の感覚では彼女の話の指していると考えられ、訳者もそのように解釈している。英語の‘lead’も日本語の「進む」も、場所移動の動詞が抽象的なことがらに転用されている場合である。‘lead’の基本となる意味は「先導する」というような意味で、そこから、「先頭に立つ」という方向と「ある方向・場所・状態へと導く」という方向でそれぞれ派生が起こっている。

(98) The wire led to the speaker.

「導く」ということは、結果を中心に考えると2つをつなげるということである。心の中に描かれる動きは以下のようになると想定できる。

図1. 動詞 ‘lead’ のイメージスキーマ



さらに、実際の動作が伴わなくても、解釈者の心の目が上記のような動きをたどると、動きのない存在物に対しても使用される。

(99) The street leads to the station.

これは、実際に道が伸びたり動いたりして駅へ連れて行ってくれるわけではない。ただし、発話者が道に沿って走らせる目の動きが、‘lead’の使用を導くのである。このようなことから、さらに抽象度が高まり、主語がモノではなくことがらに転用されているのが、この箇所である。今の困惑した状態から、解決へとつながるという意味で使われているのだが、OALDではこのような、ことがらを主語とした表現は‘figurative’であるとしている。この箇所の進行表現は先ほど示したように、事態の進展を変化と捉えたものであると考えられる。

Holmes rubbed his hands and chuckled with delight. “Our material is rapidly accumulating,” said he. (174:1-3)

ホームズは手をこすり合わせて、嬉しそうにくっくッと笑った。「材料が急速にたまって来ますね。」と彼が言った。

何度かに分けて暗号が彼の元に届いているわけだが、その断続的な反復の出来事を、集まるという一連の動きと捉えた上で進行表現が使われていると考えられる。また、事態はこれから先も進展を見せるわけで、これからも同じような暗号が届く可能性があるか、もしくは、少なくとも彼はそう思っているのだという気持ちが、進行表現の ‘possible incompleteness’ の性質によって示唆される。

Suddenly, as she spoke, I saw her white face grow whiter yet in the moonlight, and her hand tightened upon my shoulder. Something was moving in the shadow of the tool-house. (174:26-29)

彼女が話していた時、突然、私は彼女の青い顔が月光の中で更に一層青くなるのを見ました、彼女の手はきゅっと私の肩をつかんでいたんです、何かが道具小屋の蔭で動いていました。

この箇所には完了表現と進行表現の2つが現れているが、この2つの表現は共通する基準

の時点をもとにしたものである。ここでの基準となる時点とは、主語が彼女の顔を見たその瞬間のことである。「つかんでいた」というのは、この場合は主語が彼女の顔を見たその瞬間以前に彼女が彼の肩をすでにつかんでいて、その状態が顔を見る瞬間まで続いていたという完了相の結果持続の用法である。また、進行表現の方は、基準となる時点に、何かが動くという動作が継続していたことを表す。進行表現も「～テイル」表現も、典型的な使い方の例であると言える。

Seizing my pistol I was rushing out, when my wife threw her arms round me and held me with convulsive strength. (174:31-176:3)

ピストルを掴むと私は飛び出していこうとしました、すると妻はとびつくように私にしがみついて、必死になって引き止めるのです。

ここでの進行表現の使い方は、物陰から外へと飛び出す一連の動作の継続を表したものである。ただし、この継続した動作の中で、焦点を当てられているのは、相手の目に触れるところまで飛び出す以前の段階である。たとえば、走りやすい体勢をとる、とか、走り出すために足を踏み込むというような、もしくは、走り出そうという考えを思い浮かべただけの段階だったのかもしれない。焦点が当てられていたのが、典型的な進行表現よりも少し前、つまり飛び出していつている動作に入る前であったことは、「飛び出していこうとしました」という訳でも表現されている。これは進行表現の‘possible incompleteness’の性質があつてこそ成り立つものである。また本稿で対立させている「～テイル」表現を用いると「飛び出していっていましたが」となり、進行の意味ではなく、飛び出して相手の目に触れることを一瞬の出来事と捉えて、その出来事の完了を表す過程持続のような意味合いになってしまう。そうではなく、英語の未完了を強調するために「～ヨウトスル」という表現が使われたものと推測できる。

(100) *飛び出していっていましたが、飛び出しませんでした。

(101) 飛び出していこうとしましたが、飛び出しませんでした。

後に前節を覆すような内容を続けた場合の、このような2つの文の対比からも、日本語の完了と未完了の意味合いを感じ取ることができるであろう。

For two hours I watched him as he covered sheet after sheet of paper with figures and letters, so completely absorbed in his task that he had evidently forgotten my presence. Sometimes he was making progress, and whistled and sang at his work; sometimes he was puzzled and would sit for a long spell with a furrowed brow and a vacant eye. (180:11-18)

二時間もの間私は、彼が次から次へ何枚もの紙に数字や文字をいっぱい書いてゆくのを
見まもっていた、彼はすっかり仕事に夢中になってしまって、明らかに私の居ることも
忘れてしまっていた。ある時はうまくはかどって、仕事をしながら口笛を吹いたり歌を
歌ったりした。またある時は、ゆきつまってしまって、額にシワを寄せ目をうつろにし
て長い間じっと坐っていた。

この箇所の注意すべき点は、周りが単純過去表現で、この‘he was making progress’の部
分だけに進行表現が使われていることである。この部分のみに進行表現が使われている理由
を推測すると、進歩があったからといって、全てのなぞが解明されたわけではないので、
‘incomplete’な感じを出すためにこのような形式と結びついたのでないかと考えられる。他
の部分の出来事の描写であったり、口笛や鼻歌はその時そうしていたという事実だけで、こ
れから先の物語の進展とは深い関連性がないために、これ以降の展開を含意しない単純過去
表現がとられたものと思われる。

“We are going to Ridling Thorpe Manor,” said he, “but we have heard nothing of what
has passed there.” (184:21-23)

「私たちはリドリング・ソープ・マナーに行くところですが、そこで起った出来事のこ
とはまだ何も聞いていないんです。」

進行表現によって行く途中であるという意味を出すことができる。日本語の表現を考えると
「行く」はそれで結果を表すので、その動作に時間の幅を持たせるのがむずかしい。従っ
て「行っている（いつている）」とすると完了の意味になってしまうため、道程の途中である
ことを表すために「行くところ」という表現が使われている。

He leaned back in his seat, lost in gloomy speculation. Yet there was much around
us to interest us, for we were passing through as singular a countryside as any in
England, where a few scattered cottages represented the population of to-day,
(186:6-11)

座席の背にもたれて、ふさぎこんだまま思索にふけっていた。しかし、その時私たちは
イングランドの中でも最も非凡な田園地方を通っていたのだから、私たちの周囲には興
味のあるものが沢山あった、そこでは、あちこち散在する僅かばかりの小屋が今日の住
民たちを表していたし、

この部分は、馬車に乗っている間の描写である。従ってある限定された期間のことである
から、進行相の規則上は‘lean’や‘lost’を進行形にすることも可能である。しかし aspect は続

語上のルールと言うよりは、解釈者の捉え方によるところが大きいので、時間の幅を見出さない場合や、重要視しない場合には単純過去時制表現も可能なのである。一方対応する部分で日本語では、「～テイル」表現の使用により訳者が時間の幅を見出していることがわかる。その次の‘pass’で進行表現が使われている理由は、進行表現を使うことによる効果を考えると、その動作的な性質から、さまざまな景色が次々と自分たちのわきを通り過ぎてゆくという反復的な一連の動きを感じることができる。それによって読者に、景色の変化をより活動的な印象を持って思い描かせることができるのである。

I should be proud to feel that we were acting together, Mr. Holmes,” said the Inspector earnestly. (188:16-17)

「ホームズさん、あなたと協力して働いていると思うのは鼻の高いことです。」と警部が真剣に言った。

まず時制に関して、ここでは過去形が使用されているが、これは仮定法過去表現である。この捜査の場では警部よりも、著名なシャーロックホームズの方が立場が上なので、警部がへりくだっている様子を表すための表現であると考えられる。また進行表現に関しては、警部とホームズと一緒に捜査をするのは、この事件が解決するまでの限られた期間だけのことであり、しかも捜査がまだ未完了の状態であるということ、さらにこれから一緒に捜査をすることになる、という意図のある未来の計画という意味で解釈することができる。

The door of the study was open and a candle was burning upon the table. Their master lay upon his face in the centre of the room. (192:11-14)

書斎のドアは開いていて、テーブルの上にろうそくがともっていた。旦那様は部屋のまん中にうつ伏せに倒れていた。

ろうそくが燃えている様子は、ドアを開けた瞬間を基準となる時点として、その時まさに燃えている状態が続いていた、という進行形の典型的な表現である。仮に単純過去表現を使用するとなると、基準となる時点より以前にろうそくが燃え尽きたことになり、さらに普通はろうそくが燃え尽きるまでにはかなりの時間がかかるものだが、そのような時間の幅を表すことができない。その次の主人が倒れていた様子が単純過去表現で表されることによって、進行表現のような未来を含意することがないので、これから起き上がるという可能性を排除している。日本語表現では、ろうそくにも主人の様子にも「～テイル」表現が使用されている。ろうそくの方は英語と同様、動作持続の意味で用いられているが、主人の方は、倒れるという変化の後、その状態が持続している、という結果持続の用法である。

Near the window his wife was crouching, her head leaning against the wall.
(192:14-16)

窓のそばで、奥様は頭を壁にもたせかけたまま、うずくまっていた。

すでに事切れている主人の様子は、すぐ上の抜粋にあるように単純過去表現が使われているのに対して、まだ息のある奥様の描写には動作性の高い進行表現が使われている。また、‘crouch’自体の意味合いとして、うずくまるというのは瞬間的な動作のため、単純過去表現を使うと、部屋に駆け込んできた人が奥様を見たその時にうずくまった、という意味になってしまう。この場面ではそれより以前からうずくまっていて、依然としてその状態のままであった、という意味を表現しているので、進行表現が用いられているわけである。

He had turned suddenly, and his long, thin finger was pointing to a hole which had been drilled right through the lower window-sash about an inch above the bottom.
(196:13-16)

彼は急にくるっとふり向いて、下側の窓障子の下から一インチばかり上がった所をきれいに貫通した跡の穴を、長い、細い指で指し示していた。

物語の語り手が彼（ホームズ）の方を見たときには、すでにホームズは向きを変えていたため、‘turn’は過去完了表現が用いられている。向きを変えることに時間的な幅を見出していないため進行形ではないのである。一方 ‘point’の動作は、上で述べた‘crouch’同様、本来ならば一瞬でできる動作である。従って単純過去表現では、指差したまましばらくじっとしているという時間の幅を表現することはできない。ここではホームズが一瞬で指差し、その体の状態を継続しているという意味で進行表現が用いられている。

“In fact, if I am not very much mistaken, here is the gentleman himself coming up the drive.” A man was striding up the path which led to the door. (216:20-24)

「実際に、ほれ、どうやら、問題の人物が御自身で馬車道をやって来たじゃありませんか。」

この部分の進行表現は、最も典型的な動作の継続を表したものである。今まさにどんどん近づいてきている様を活動的に読者に思い起こさせる効果が期待できる。

Who was this Englishman that he should come between us? I tell you that I had the first right to her, and that I was only claiming my own.” (220:14-17)

われわれ二人の間へ邪魔に入るとは、このイギリス人野郎は一体何者だい？いいかい、

ほんとにおれはあの女を貰う第一の権利を持ってたんだ、おれは正当なじぶんの権利を要求しただけのことなんだ。

この箇所では英語の表現では、暗号文を何度も送ったことを一連の繰り返しの動作と解釈して進行表現が用いられている。しかし日本語では「～タ」というように、同じ動作をひとまとまりの過去のことがらとして捉えていて、そこに時間的な幅を見出していない。状況から見て、反復的な数回にわたる動作を表現しているので、日本語でも「要求していた」としたほうが、状況をより捉えた表現になったのではないかと考えられる。

A cab had driven up whilst the American had been talking. (226:17-18)

アメリカ人が話し続けていた間に馬車はもう乗りつけて来ていた。

まず、馬車の到着が過去完了表現で表されているのは、過去の発話時よりも以前のある時点で馬車が到着していたからである。話していたことに進行表現が使用されているのは、同期間に同時に進行中のことを表す以下の用法と類似点が見られる。

(102) **While she was washing the dishes, he was chopping the firewood.**

この箇所では完了の期間と進行の期間なので、わずかにズレはあるものの、物理的には馬車の出動を要請してからこの発話時までの期間に2つの出来事が起こったということである。また、ここでは1文に完了表現と進行表現の両方が使われ、ともに日本語に訳すと「～テイル」表現が使われているというのも興味深い点である。

5. おわりに

英語の進行表現とは、簡潔にまとめると、一定期間内に継続していることがらや断続して繰り返し起こることがらであり、それが未完了の状態、未来においても続いてゆく可能性を表したものである。最も典型的なものは、時間の幅が感じ取られるくらいの長い間、続いている動作や、ひとつひとつの短い動作が何度も繰り返し起こっている場合であるが、進行表現の使用はそのような具体的なものに限ったことではない。状態動詞と呼ばれるような、一見すると動作性の低い動詞であっても、程度の変化が感じ取られる場合、一定期間だけ普段と違う状態になっている場合、意図を持って普段と違う状態にしている場合などには進行表現が可能である。相表現の使用は、文法規則というよりは、上記に挙げたような特徴を解釈者が状況の中に見出すかどうか、によるものである。

英語の進行表現に対する訳語として「～テイル」表現が用いられることが多い。確かに両者には共通部分もあるが、その意味範疇にはズレも存在する。「～テイル」表現は、英語の進

行表現で表されるのと同様の、動作や状態が継続している様子を表すだけではなく、英語では完了表現を使って表されるような、過去の変化の結果や影響力が基準時点まで残っている様子も表すことができる。いづれもある状態の持続という点で共通していると考えられるからである。しかし、一瞬で起こる意味を含む動詞の英語の表現を「～テイル」と訳してしまうと、完了か進行かははっきりしなくなってしまう場合がある。そのような場合には、進行であることを強調するために「～テイク／ユク」や「～クル」表現を使う場合もある。このように、英語の進行相と完了相、日本語の持続相と完了相という区別の視点が違うわけだから、日本人学習者にとって英語の相の概念を理解するのが難しいのも当然と言えよう。それを少しでも改善するには、両言語における事態区分の違いをはっきりさせることが重要である。

また、一続きの物語の中での進行表現の使用を観察することによって、進行表現の持つ特殊な効果を見出すことができた。反復を強調することにより、それに対する話し手の苛立ちや軽蔑を表現することができる。また、進行表現に特徴的な動作性の特徴から、描写する状況を静止画風ではなく、生き生きとした映像のように読者に思い描かせ、表現に臨場感や現実味を持たせる効果がある。このように文法形式から意味を導き出すことによって、感覚や推測に頼った文学鑑賞ではなく、根拠ある文学鑑賞へとつながってゆくものであると信じるものである。

本研究は、平成 20 年度嘉悦大学「特別研究」として行われたものである。研究成果を結実させることができたのは、学校法人嘉悦学園が研究活動を支援してくださったためである。感謝の気持ちは、今後の教育活動を通じて表してゆきたい。

参考文献

- Doyle, Arthur Conan (1958) *The Speckled Band and Other Stories*, translated by Shunjiro Doi, Tokyo: Kenkyusha.
- Greenbaum, Sydney and Randolph Quirk (1990) *A Student's Grammar of the English Language*, London: The Bath Press Ltd..
- Hornby, A. S., Sally Wehmeier, Colin McIntosh, Joanna Turnbull and Michael Ashby ed. (2005) *Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English 7th ed.*, Oxford: Oxford University Press.
- Lee, David (2001) *Cognitive Linguistics An Introduction*, London: Oxford University Press.
- Leech, Geoffrey (1975) *A Communicative Grammar of English*, London: Longman Press.
- Leech, Geoffrey (1987) *Meaning and the English Verb 2nd edition*, Japanese notes by Harumi Sawada, Tokyo: Hitsuji Shobo.
- Pearsall, Judy and Patrick Hanks ed. (1998) *The New Oxford Dictionary of English*, Oxford: Clarendon Press.

- 安藤貞雄（2005）『現代英文法講義』開拓社
- 池上嘉彦（1981）『「する」と「なる」の言語学』大修館書店
- 池上嘉彦（2000）『英語VI（'99）＝英語の意味＝』放送大学教育振興会
- 石綿敏雄、高田誠（1990）『対照言語学』おうふう
- 久野暲、高見健一（2005）『謎解きの英文法 文の意味』くろしお出版
- サイデンステッカー G. エドワード、安西徹雄（1983）『スタンダード英語講座2 日本文の翻訳』大修館書店
- 瀬戸賢一、武田勝昭、山口治彦、小森道彦、宮畑一範、辻本智子編（2007）『英語多義ネットワーク辞典』小学館
- 寺村秀夫（1984）『日本語のシンタクスと意味 第Ⅱ巻』くろしお出版 pp.123-146
- 中村保男（2001）『創造する翻訳—ことばの限界に挑む』研究社出版
- 松村瑞子（1996）『日英語の時制と相—意味・語用論的観点から—』開文社出版
- 鷲尾龍一、三原健一（2000）『日英語比較選書⑦ヴォイスとアスペクト』研究社 pp.108-186

（平成 21 年 5 月 23 日受付、平成 21 年 7 月 18 日再受付）